

阿木城だより

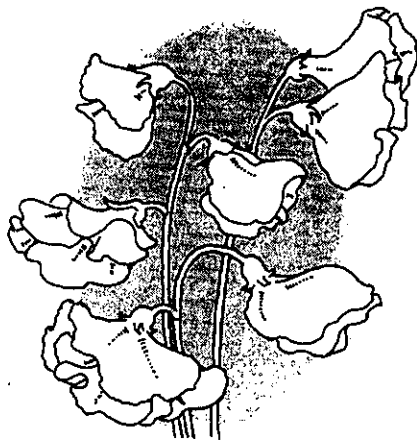
阿木城跡保存会
阿木公民館内
2019年1月発行 NO2

< 築城は織田か武田、450 年前 >

阿木城は地元の勢力だけでは造ることも守ることもできない大きな規模の城で、高い防御性を備えており、巨大勢力によって作られたと考えざるをえません。

巨大勢力というと、450 年ほど前の戦国末期、この地方一帯で織田信長と武田信玄・勝頼が岩村城をめぐる戦いをくりひろげていますが、その時にどちらかの勢力によって造られたとみられます。

また、虎口（＝近世の城で言う大手門）の造り方や、土塁（土を土手状に長く積み上げた防御施設）よりも切岸（人工的に造った急斜面）を重視した築城方式は、天正3年（1575年）以前に造られた可能性があります。



< 城主は戸田甚左衛門 >

岩村藩に丹羽氏が転封してきたさいに作った、「岩村近辺城主覚」という文書が残っています。ここには戦国末期の近辺の城や砦等の名、さらには城主名が書かれており、阿木城については戸田甚左衛門がいたこと、砦に相当すると考えられるものだったことが分かります。

砦というのは軍事目的で作られた城のことで、領民を支配するための行政施設ではありません。領主とは別の武将が城主（＝番手）になっています。

この戸田甚左衛門ですが、同文書中に「久須見村」「阿寺城主」としても名があがっており、番手としてかけもちをしたようです。ですが、後の世の文書文献にはその名が全く見られず、子孫も見当たりません。このことは、戸田甚左衛門が地元に住んでいた土豪あるいは領主ではないことを表していると考えられます。



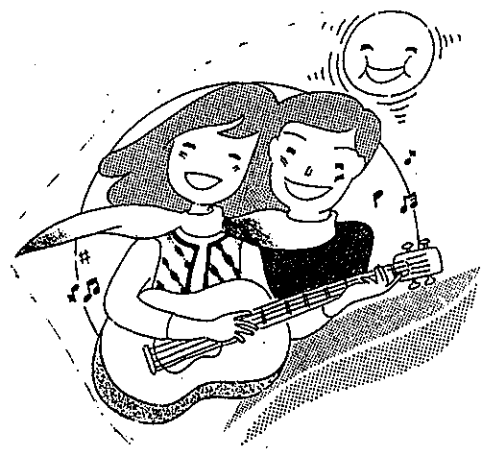
今回は昨年夏に「阿木公民館講座」として開催した、阿木城についての講演会の報告です。

講師は恵那市の三宅唯美先生。岩村城の発掘調査の中心をになって活躍された方で、著書も数多くあります。

本文発行にあたり、ご好意で監修をしていただきました。

＜築城から廃城まで長くて5年＞

冒頭「阿木城は地元の勢力だけでは造ることも守ることもできない大きな城」と書きました。巨大勢力が造ったということです。阿木近辺に巨大勢力が城を造った時期は、歴史上、織田武田がこの地でぶつかりあった、長く見て元亀年間から天正年間初期、西暦では1570年から1574年の5年間ほどしかありません。



＜この地方における織田・武田の戦い＞

勢力を伸ばしてきた織田信長と武田信玄は、永禄8年(1565年)、瑞浪市の神籠(こうの)で戦い、一旦同盟します。以降東美濃東部は武田、西部は織田の勢力下に置かれ、東部の中津川市や恵那市一帯の土豪たちは、独立を保ちながらも武田方に従っていたと見られます。

しかし元亀3年(1571年)、岩村城主が死亡した機会をとらえ、信長は岩村城に配下の武將や四男御坊丸を送り込んで奪おうとします。

最新の研究では、送り込まれた後も、岩村遠山氏は自発的に武田方に従属したことが分かっています。

岩村城は美濃(岐阜県)と信濃(長野県)、三河(愛知県)とを結ぶ交通の要の地域にあって攻防の拠点となることから、天下をうかがう信長、信玄どちらにとってもどうしても手に入れたい城でした。

岩村城を奪うため、織田軍は周辺土豪の協力を取りつけ、元亀3年、上村(上矢作町)から攻め込みます。織田軍と周辺土豪の連合軍は負けはしましたが、戦いを通して岩村城周辺全域が織田方だとはっきりする一方、岩村城のみが武田方として孤立しました。

信玄の死後、後を継いだ勝頼は、天正2年(1574年)に失地回復をめざしてこの地に攻勢をかけ、回復に成功します。が、翌天正3年(1575年)、長篠の戦いで勝利した信長軍は続いて岩村城を陥とし、武田軍を美濃から信濃へと追出し、その後滅亡させました。

＜岩村城攻めのさいの阿木城の役割＞

天正3年(1575年)、信長軍は岩村城を攻めるさい、包囲作戦をとりました。武器食料などを岩村城に運び込まないように、主要道の各地に城や砦などを配置したのです。その目的のために阿木城も使われました。

阿木城がこの時造られたのか、それともすでに武田軍が造っていたものを利用したのかは分かりません。どちらかの勢力が造り信長軍が包囲のため活用し、武田軍が美濃から撤退するとともに用が無くなったというのが阿木城です。

